

江五月雨

たちこゆる浪にたよふ夏かりの玉江のあしのさみたれのころ 宣長

難波江や入江の波のさみたれにあしのすゑはそみえてすくなき 春満

みつしほもあらそひかねてなかる也ほりえの水の五月雨のころ 長流

さみたれにつま木の道もたえにけり谷のいはし水こえしより 春海

山河の岩根にわたす柴橋のつめたにみつる五月雨のころ 契沖

常磐木のみ山のおち葉五月雨にくちてなかるよ谷川の水 全

はれやらぬいけの心のいふせさもにこりにみゆるさみたれの頃 宣長

さみたれに池よりこゆるたまり水ぬなけや駒の道をほたさむ 契沖

五月雨に瀧はおとはの名もしるし岩うつ浪そやまよひなる 春満

しはやかてはとふるひまにしかのあまはさみたれ髪や梳るらん 全

さみたれの雨につなても朽はてしみを引ぬふるよどのかはふね 春海

五月雨はをふのうらなしみつ汐になりもならずも浪そよりくる 宣長

鏡山にはてるかけもけふいくかくもりはてぬるさみたれのころ 春満

から崎や松かせたえて志賀の浦の浪にかりある五月雨の雲 千蔭

なにはかたみきはのあしの末葉までなみに入江のさみたれの頃 宣長

水邊五月雨

湖五月雨

浦五月雨

船中五月雨

海邊五月雨

瀧五月雨

池邊五月雨

池五月雨

溪五月雨

橋五月雨

名所五月雨

五月雨難晴

苦雨初入梅

梅雨留客

梅雨久

梅雨送日

五月雨晴

五月雨迷惘

螢

水増るひのくま川のさみたれにかりにも月のかけをたにみす 千蔭

はれやらぬ五月の空は久方のあめにかよへる名にこそありけれ 契沖

卯花をくたすかめのさなからにいふせさそはるさみたれの空 千蔭

軒くらく木よのしつくのをやまぬはうしやけふより五月雨の空 蘆庵

我やとに雨つゝみせよさみたれのふりにしともかたりつくさむ 千蔭

ふる雨のはれぬ日數もあらはれてのきはのうめの色そゝひゆく 蘆庵

雲とちて日をふる山のさひしさもおもひやらるゝさみたれの頃 全

さみたれも限われはやあふち散るをかへの庵に夕日さしけり 千蔭

五月雨にいたるの水はましにけりこよひや月のかけをやとさん 春海

さみたれもきのふまでとやみさひぬし庭の池水すみわたるらん 枝直

玉さゝのよのまにはれてめつらしく朝日まらとる五月雨の露 宣長

春雨は花をみつゝもなくさめきせんすへしらぬさみたれの頃 たみ子

とふはたるあはれとそみる草の原もえてもねにはたてぬ思ひに 春満

こゑをたにしのみとならばゆく螢こかるとひとにしられすも哉 枝直

宵のまにみえしはたるの數そふやわかつき露にうつるなるらん 千蔭

夜 螢 風さそふしのゝをさゝにちる露のなこりおほえてとふ螢かな  
 筑波子 春海  
 深夜螢 月はいりてなほ草むらの露のうへにのこるひかりは螢也けり  
 千 蔭  
 閑居螢 うきとをますたのいけにとふ螢よたゝおもひにこかれもそする  
 春海  
 窓前螢 さ夜ふけてみらくのおほき螢かな月は入ぬる磯のくさ葉に  
 宣長  
 腐草化為螢 やへとつるむくらの露やもとむらんよなくすたく窓の螢は  
 蘆庵  
 螢火似流火 吹かせにはたるのかけもすゝしさをあらそふ窓の竹のよなく  
 宣長  
 螢火如玉 けちはてぬおもひのくさやくちてしも螢と成てみまをこかすらん  
 蘆庵  
 螢火似灯 ひろふとも光はさえぬ玉なれや真砂のつゆにすかるはたるは  
 春満  
 蠅似露 秋まちておもひみたるゝ彦星のかさしの玉やはたるなるらん  
 契沖  
 ともし火の花かもちるとみるをかりまどのとちかくとふ螢かな  
 千 蔭  
 とふ螢はかなき露とみえなから何ゆゑさえぬ思ひなるらん  
 春海  
 風わたるおなし草葉にちる露のさえせぬ玉を螢なりける  
 春満

草螢似露 わさなへの葉すゑの露のくれそめてちるとみゆるは螢なりけり  
 千 蔭  
 螢火似星 天津星おちても石とならぬまやしそし河邊の螢なるらん  
 長流  
 叢間螢 くもりよも星のひかりのうつろふとみゆるや池の螢なるらん  
 千 蔭  
 螢照叢端 風さそふ夏のゝ草のたもとよりつゝみもあへすとふはたるかな  
 春海  
 草 螢 とふ螢いかにおもひをけちかねておするゝ草の露たつぬらん  
 枝直  
 雨中螢 ゆふたちのなこりの露のくさむらに涼しくもえてとふ螢かな  
 春満  
 雨 中 螢 くさむらの螢よいかにさく花の秋をはまたすならひそめけん  
 千 蔭  
 水邊螢 ひたふるにけたぬ螢のれもひにはあらそひかねてすくる村雨  
 枝直  
 水 邊 螢 東屋の雨のしつくもかすみえて軒のしのふにとふ螢かな  
 千 蔭  
 水 邊 螢 せきかけし庭のやり水をやけれとうつる螢のかけはなかれす  
 枝直  
 水 邊 螢 水ひろみ空に螢のとふかけのうつろふかすもおほさその池  
 宣長  
 水 邊 螢 くさ深き野中のし水それをたに有としらせてとふ螢かな  
 春海  
 水上螢 もえつゝもおのかかけみるすゝしさに螢も水のうへや行らん  
 宣長  
 水 上 螢 くさしけみ野澤の水はみえねとも有とやこゝに螢とひかふ  
 枝直  
 澤邊螢 なつむしのかけはあまたになりゆくや淺澤水のそこみゆるまで  
 春海

田 螢

人心あさしは水のうきくさにおもひみたれてとふはたるかな  
とふはたるなれも野澤のみつからはもえてもうつる影や涼しき  
つれもなき人をこひちにたつた子の思ひやよはの螢なるらん  
吹かせのさそふまにくうき草の螢なかるいけのおもかな  
千 蔭

池 螢

飛はたるおほかるかけにみ草おふるかくれの池は名のみ也けり  
うきくさにすかる螢もさそはれて風にたよふにはのいけ水  
網引するなにははりえのみたれわしのおもひみたれてとふ螢哉  
自 寛

江 螢

夕月も入江のなみのくらきよにおのれしるくもとふはたる哉  
とふ螢おはすはなにをちる玉のをのふる江にもゆる思ひそ  
宣 長

河 邊 螢

ふけぬるか河おとたかくなるまよにみくさのはたる光そひ行  
木の川にもゆる螢やいもせ山へたつる中のれもひなるらん  
枝 直

瀧 下 螢

おち瀧つなかる水のしら玉にひかりをそへてとふはたるかな  
落たきつ瀧のしら玉よるとにかすそふものははたるなりけり  
春 海

橋 螢

涙なきれもひもいつれたかけんと瀧にくらへてとふ螢かな  
とひわたる螢のかけもあかぬよのおくるわひしきくめの岩はし  
宣 長

海 邊 螢

くちかゝる谷の柴はしあやふきをみよとやてらす螢とふかけ  
とふはたるもえこそわたれ河はしのかもてに物や思ひみたる  
蘆 庵

浦 螢

すみのえのきしにかふてふ草葉にもゆる螢のこひやわすれぬ  
海人のかる藻にすむ虫のおもひ草くちてやもゆる螢なるらん  
契 沖

行路螢火

浦風に螢みたるあしのやのさとはよるこそとふへかりけれ  
はたるより外にわはれはなつ衣ひもゆふやみをたどりゆくのは  
春 滿

故郷螢

くるより人はおとせぬ道のへをよるゆくものは螢をりけり  
眞管おふる川そひ道のゆきすりにつゝまぬ袖もはたる乱る  
契 沖

名所螢

ふるさとのみかきかはらの夏草によるはもえつゝ飛螢かな  
たちかへり住にしさとを今とへははたるどひかふよもきふの露  
古 道

螢火透簾

とふはたるおのかひかりやたのむらん桂のさとのゆふやみの空  
ゆふかせのをすのゆらきにそこはかどみたる玉は螢なるらし  
契 沖

小扇撲螢

うなむらかきそふあふきを打やめてあかる螢をくやしとそみる  
はたるとふ難波のこやのわし垣のまちかくも有か秋のけしきは  
長 流

螢火秋近

とふはたる夏をやをむし秋やまつ河にみたるおもひなるらん  
枝 直

螢火乱飛  
秋已近

晚夏螢  
水 鷄

みそき河しのにをりはへはす袖の露とみたれてとふはたる哉  
閨の戸をせさちの鳥のそらねしてたしく水鷄のはかるよは哉  
門に来てをかる水鷄と知つゝもたしくはさすかうとまれもせず  
夏之夜は天の戸はやくわけぬめりたしくひなや驚かすらむ  
菖蒲草かふる野澤のみこもりに聲あらはれてなくひなかな  
夕月もしはしはかけをどしめけりくひな聲するかどのいさらぬ  
ぬるほとも夏のよすからたか夢をたしく水鷄のねとろかすらん  
よもすからたしく水鷄のおはれさを人ならずとてよそに過めや  
さらしてしもみはてぬ夢のみしかよをいかて水鷄の驚かすらむ  
横の戸もさして人まつ月のよになにをくひなのたしくなるらん  
横の戸をたけはやかてあくるよの水鷄は人をはからさりけり  
ふるさとのやへ葎してさすかどそたしくひなもこりぬへき哉  
むくらはふ我やとをしも叩くなる水鷄やよはのなさけなるらん  
谷の戸のあけてくひなはかとせぬを猶若たしく山のした水  
くひな鳴木の間の月はかたふきて人かともせぬ山かけのいほ

春海  
契沖  
枝直  
土満  
春海  
千蔭  
春満  
たみ子  
春満  
千蔭  
春海  
契沖  
眞淵  
長流  
蘆庵

山家水鷄

閑居水鷄

曉水鷄

月前水鷄

水鷄驚夢

水鷄終夜

夜水鷄

夕水鷄

柴の戸はあけなからねし夏のよにたしく水鷄やいつこなるらん  
れもひきやいせの濱荻折しきてよたしくひなにとはるへしとは  
かへるまでしくれし蟬は聲やみて霜ふりかはる夏のよの月  
大空を霞もきりもへたてねはなつこそ月はみるへかりけれ  
あつさをもわするよかけのあやにくにたえて短き夏のよの月  
あつさをもわするよつまとなりにけり軒にまちとる夏のよの月  
またよひとなにかもひけん夏の夜の昔の月はどくいてにけり  
むすふてにうつろふ月をまつ陰やたちもはなれぬまし水のもと  
まし水を月かけなからむすふまに月はのこりて夜そあけにける  
くれはてぬ空にはのめく月みればやかてあけゆく嶺のよこ雲  
さらぬたに明やすきよを月影のまたれていつるとなくもかな  
弓張の月はみそらに影どめてさをなくるまにあくる夏のよ  
まちとりて草葉すしき露のまもなつのよをしくしらむ月影  
夏の上はあけなんほどのほかなさにいとめかれぬ月の色哉  
なつの上の月にかもへはあたなりとみてし櫻の花そのどけき

水鷄何方  
泊水鷄  
夏 月  
對泉待月  
夏夜曉月  
短夜月  
夏月易明  
夏夜翫月  
夏夜惜月

春海  
枝直  
長流  
千蔭  
蘆庵  
春海  
枝直  
千蔭  
全  
枝直  
春海  
枝直  
宣長  
千蔭  
枝直

夏夜月明

水枝さす葉ひろくまかし露ちりて月かもしろきよそにも有かな  
心さへはれゆく空のすゝしさは風こそ月のひかりなりけれ  
春海

水夏月

松かけの板のし水くみわけてむすふ手にみる月そすゝしき  
枝直

夏月浮水

やとるよりなつなきよはの月かけにむすはてむかふ庭のやり水  
春満

水上夏月

夏の上やうつろふ月のかつら河かけなからこそせきいれにけれ  
千蔭

水路夏月

行水によとむまもなきなつのよの月はこほりどいかてみゆらん  
春海

水邊夏月

さをさせはなつをわするゝ夕河にこほりをくたく波の月かけ  
全

河夏月

すみた川よとせもかもな涙こゆるあしのはすゑのみしかよの月  
千蔭

河上夏月

水もなき空にみるたにすゝしきをまして河せのなつの月影  
宣長

河邊夏月

みなせ川なかるゝ水のうたかたにやとるもよかななつのよの月  
千蔭

池夏月

をふねさす淺瀬のさをのみしかよになかれてはやき浪の月かけ  
枝直

海邊夏月

澄かけもふけゆくまゝにすゝしきはますたの池のなつのよの月  
宣長

磯夏月

明やすきよを長かれとくり返し月をゝしまの海人のたく繩  
枝直

磯夏月

浮みるのみるほともなし夏荊のわしやのさとのみしかよの月  
契沖

古道

浦夏月

浦の名のみぬめとやいはん見るほともなみまに明る短夜の月  
春満

江上夏月

すゝしさをつゝみてかへるよしもかな袖しのうらのなつよの月  
宣長

山家夏月

漣のひらのおはわたよとめともよとみもやらぬみしかよの月  
千蔭

竹亭夏月

すゝしさのいつこはあれど山里はしみつに月のかけやどるころ  
春海

夏月透竹

山のゐのつるへの繩のみしかよに月のかけくむ杉のしたいは  
枝直

名所夏月

なつのよの月の霜にまたわむらんまたうら若き窓のなよ竹  
千蔭

樹陰夏月

くれゆけは月と風とをやとしつゝなつをわするゝまどのなよ竹  
春海

樹間夏月

ことしおひのまどのくれ竹風をまち月みよとてや枝たわむらん  
千蔭

雨後夏月

伊勢しまや浦の名におふ大淀にしはしこよとめ夏のよの月  
同

雨後夏月

なにをかたうら浪すゝしみしかよのあしの葉のはる露の月影  
枝直

樹陰夏月

松かけや風の絶間もすゝしきは梢をわたるなつの夜の月  
宣長

樹間夏月

明やすきうらみのみかは木ゝの葉にくまさへおほき夏のよの月  
枝直

雨後夏月

山のはゝ霞も霧もへたてねど若葉にくもるなつの夜の月  
春海

雨後夏月

よひの雨にぬるゝ水枝をもれ出る月の色こそなまめきにけれ  
千蔭

全

夏月涼

依月夏涼

ゆふたちの雨のなごりの空はれて月に袖はすよはそすしき  
 くるゝ夜のおのかなごりのすしさを月にゆつりてはるゝ夕立  
 秋をまつ稲葉の露をよすかにてはに出る月の影そすしき  
 すしさは風もおもはてあかすよに月みぬ人や秋をまつらむ  
 夕立のなごりの露の玉すたれかゝけてみねの月そすしき  
 はしるしてむかへはすし短夜の月には秋もまたれさりけり  
 ひとへたにいとはしかりし夏衣かさねまほしき月のすしき  
 雨過て月のかつらの露さへもちるかどみゆるよはのすしき  
 かせ清く月すむよはゝ夏をしもえこそしらゝの濱のまさこち  
 霜のうへにぬるこゝちして夏のよの床にかけしく月そすしき  
 かち人もわたるはかりに月かけの夏さへこほるすこのうみつら  
 水のおもにてるすしさはみな月の光も秋のもなかなりけり  
 おどたてぬをさの上葉の夕露に待とる月そまたき秋なる  
 山かつのいはほをかけて住やとををらまくほしきなてしこの花  
 花の色は唐くれなるに匂へともみなしきしまのやまとなてしこ

砂月涼  
 夏月似霜  
 夏月似氷  
 夏月如秋  
 月色似秋  
 瞿麥

枝直  
 宣長  
 枝直  
 宣長  
 枝直  
 蘆庵  
 千蔭  
 全  
 契沖  
 千蔭  
 宣長  
 契沖  
 千蔭  
 蘆庵

唐撫子

名所瞿麥

庭瞿麥

覆麥副牆

籬瞿麥

撫子色

朝折瞿麥

每朝見撫子

愛瞿麥

常夏にゝはふなてしこいくたひかはくゝむ露のかきかはるらむ  
 からにしき色こき中にくれなるのゆはたもましるなてしこの花  
 色ゝの唐なてしこのにしきにはれとりやしなんやまどこの葉  
 なつかしき色にしさけはこゝならぬ唐なてしこもうとまれぬ哉  
 なつくさのあひ手の濱にあまの子のたれどわかれし床なつの花  
 なつ草にやつるゝ庭をねなくはいさなてしこの園になしてん  
 咲にけり殿のみつはのわや垣かさねのまゝにうゑしなてしこ  
 賤のをか草にやつるゝ籬にもあはれはそへつなてしこのはな  
 色ゝの秋の千くさをひとくさにかねてそさけるなてしこの花  
 常夏のたゝひと時に春秋の花のにはひをあつめてそさく  
 ことくさの花やはれよふ水無月のてる日の色にさけるなてしこ  
 花の外のはれも今朝は思そひてをるてにすかるなてしこの露  
 かつゝも咲そめしより常夏にゝははん花は朝にけにみん  
 よひの雨のなごりいかにと露にさへねくろおかるゝ床夏の花  
 天津日の色にはさけと草かくれ光すしきなてしこの花

土満  
 春海  
 契沖  
 春海  
 契沖  
 春海  
 春満  
 全  
 春海  
 全  
 蘆庵

老見瞿麥	夕撫子	夜撫子	雨後瞿麥	瞿麥露	撫子厭露	瞿麥帶露	夏草	朝夏草	庭夏草	野夏草				
なてしこの花みるからにむかしへに心はかへるものにそ有ける	唐衣ひもゆふくれの露をおもみうらふれたてりやまとなてしこ	唐にしきやみのうつゝのなてしこにしおしまたれてみする月哉	なてしこの露こそとにあはれなれ心ありけるよひのあめ哉	朝な／＼さくどこなつの花にわく露のまはかりなつとしもなし	いかならんねよけにみゆる床夏の花にかきある露の心よ	露たにもいたくなおきそうれを重みまたかたなりにみゆる撫子	うるはしきわか撫子の花の露かゝれとてこそははしたてつれ	夏草もふみわけかたくなりけり雪にまよひしをのゝはそ道	たをやめの若菜すみれにふみなれし道も残さすしけるなつ草	秋のゝにつくりし庭もおのつから花さかぬ草のかくやしけりし	朝な／＼露おもしろき夏草はいふせしとてもなにかえらはん	わけてよも人とはしな夏くさに我さへたどる庭のかよひち	秋まちて花さくたねやましれるとはらひかねたるにはの夏草	しけれなほわかす色ゝの花にみん秋もほとなきのへのもゝくさ
古道	土満	契沖	千蔭	枝直	宣長	蘆庵	千蔭	契沖	枝直	春満	千蔭	蘆庵	枝直	春満

杜夏草	徑夏草	行路夏草	水邊夏草	山家夏草	名所夏草	風前夏草	夏草露	夏草滋	夏草深	苜夏草	夏草花	兼待秋花		
うちなひきはきもすゝきもしける野に草かるをのこ心してかれ	こかくれてすゝしき陰どかる人も外よりしけきもりのなつくさ	さすかなは道はみえけりしけりてもゆきゝもしけきのへの夏草	行さきも道はありけりなつくさのしけみかかくにみゆるすか笠	なつくさに野中の水はうつれぬもこのゝろをたどるはにふに	道もなくしけるにつけて山さとの人めはいとゝかるゝなつくさ	さをしかは今つのくむをおはつのゝすくろの薄先そしけれる	はらはしな庭のなつくさしければそ露をたつねて風もどひける	しけりてはあさゆふつゆのすゝしさにかりもはらはぬ庭の夏草	のへ見れば夏草たかくなりけりわけゆく人や道たどるらし	しつのをかかりにし跡の日たにへすひとつにしけるのへの夏草	こゝかしこきのふかりつる跡はかり葉すゑみしかき野への夏草	かりそらふあどよりしけるなつ草に心の道のゆくへをそみる	なつのゝもさゆりなてしこ咲ころは秋の錦にたちまさりけり	ふみわけてゆきこそわふれ道のへや花の秋まつ草のしけみは
契沖	宣長	全	千蔭	春海	宣長	契沖	蘆庵	宣長	契沖	公庸	宣長	蘆庵	千蔭	全

草花先秋  
野草秋近

百合

萱草  
鶉川

夕鷺河

いつしかと秋のちくさの花かすもなかはみえ行なつの野へかな 春海  
 秋ちかきのちの草むら露さへもむすふはかりにはやなりにけり 全  
 ことゝはんなつのゝ野鳥今いくかありてさくへき秋のはつはな 枝直  
 秋ちかく野はなりぬらし百草のたもとすゝしくゆふ風そふく 古道  
 心とくなつのゝさゆりさかさらは秋はそれともみやはとるめぬ 契沖  
 あつさにはみたれなからもえならすよにはふさゆりの花の姿は 筑波子  
 たゝひとり秋の千くさにあらそはぬさゆりの花そあこれける 千蔭  
 夏のゝにたれをやさしとしのふらん葉かくれにさく姫ゆりの花 春海  
 庭ふりてあるし垣根のわすれ草花しさかすは名にそおはまし 契沖  
 大の河月もをくらの山かけをやみにみなしてうふねさすらん 全  
 ちる花のおもかけさらぬ大の河よかはにうかふ瀬ゝのかゝり火 千蔭  
 をりこそあれ月の桂のさと人もやみをそたのむうかはたつとて 春海  
 かゝる身のちきりもかなしうかひ人なれも浮瀬を思はさらめや 蘆庵  
 なつのよのはやき河せのうかひ舟さすかにくたすほどは有けり 宣長  
 うかひ舟しはしかほどの夕やみにあらそひのはる篝火のかけ 千蔭

深夜鶉川

深更鶉川

連夜鶉川

毎夜鶉川

深夜鶉舟

鶉舟多

鶉舟多

夜河籬

夜河籬

瀬鶉舟

雨後夜川

名所鶉川

夕月の入かたちかき山かけをやみもまちあへすら舟さすなり 蘆庵  
 有明の月はよかはにはのめきてかすかになりぬかゝり火のかけ 千蔭  
 大の河くたすらふねのかゝり火のさよふけぬれやまれになり行 蘆庵  
 篝火のこの夜やなほをしむらん月にそむきてくたすら舟は 枝直  
 大の河行めぐりつゝいくよはかう舟のかゝりさしもたゆまぬ 自寛  
 夕月のいるさのおそくなるまゝによなくふけてくたす篝火 蘆庵  
 さ夜ふけて月のいるさをまつら河七瀬にきそふうかひふね哉 千蔭  
 うかひふね所せきまてうかふよとやみとしもなきしら河の水 全  
 さみたれにうかはの水やはやからしよとみもあへぬ篝火のかけ 全  
 短夜のうふねのかゝりもえ盡は何にのちせのやみをてらさん 蘆庵  
 桂人うかはたつと波の上にみたれて見ゆる瀬ゝのかゝり火 千蔭  
 深きよの河せにのこるかゝり火やおくれてくたすら舟なるらん 蘆庵  
 うかひ舟雨よりのちはさすほどもいかしなみまに夜を惜むらん 春海  
 こゝをせにうふねさすらしよしの河岩もとさらぬかゝり火の影 枝直  
 名にしおふ月のかつらの川せにもやみを時なるうかひ舟かな 千蔭



蚊遣火

をりしにかやりの烟たきけつや賤もこゝろを月によすらん  
 かやり火の烟にむせふみどり子か聲もいふせきやどの夕くれ  
 夕月のかけこそかすめをちかたのかひの烟のすゑなひきつゝ  
 ふきいるゝ軒の烟のいふせさに風もやつるゝしつかゝやり火  
 きえなはとほるゝを待しかやり火の烟なからに月をわけゆく  
 あけゆけどまたも打たく蚊遣火になはよをのこす賤かさゝふき  
 立のはる夕へのかひの烟にそありとしらるゝこかくれのやど  
 たきさしてのこる烟もすゝしきは月になるよの軒のかやり火  
 夕くれはかやりもそひて立烟うすきやさとのどほきなるらん  
 をちかたやしけみかおくのかやり火に賤か家ゐの數もみえけり  
 ゆく水にゆふへの月はすみなからかやりにくもる川つらのさど  
 夕されはかやり火たかぬやともなしこのさと人は月やみさらん  
 もしはやく浦ととなしに夏くれはけふりたえせぬ里のかやり火  
 かひたつる賤かけふりのいふせさもよそめにしるき里の夕くれ  
 難波かた潮干のこつみかきつめて浦のとまやにかやりたくらん

春海 蘆庵 千蔭 宣長 全 春海 千蔭 蘆庵 枝直 千蔭 全 眞淵 土満 蘆庵 土満

里蚊遣火

浦蚊遣火

照射

ねらひするさつをのまふししらてよる鹿も羊のわゆみなりけり  
 筑波山花たち花のにはふよはともしのせなもかをそどめける  
 うかるへき報いにかへてともしさし鹿まつ業もやすけなの身や  
 つくは山は山しけ山ふみさくみともしかりするますらをのとも  
 ともしすとふたみかはれる箱根山鹿にもあはてわけしよはかな  
 さえかたの嶺のはくしにあらそひて雲間をいつるわけはしの影  
 鹿のたつあら山中のあらをらかやすかはよるのともしなりけり  
 五月やみ木陰山かけくらきよりくらきに入るともしすらしも  
 ますらをも山のしづくに立ぬれぬ鹿をほくしのまつとせしまに  
 かせわたる夏のゝ草の露のまの身をわすれてやともしさすらん  
 かたわけてしかのたちとや尋ぬらんみねにはくしの影そはり行  
 曉によとなりぬらしさ月山木のまのともしかけしらみぬる  
 明やすき夜をやあらそふ五月山はくしの光どころせきまで  
 五月山はしの林となりけりいくそのせなかどもしさすらむ  
 ますらを筑波の山の山かけにますかけなしともしすらしも

長流 契沖 蘆庵 土満 契沖 千蔭 蘆庵 契沖 全 蘆庵 春海 長流 契沖

曉照山

照射欲明

山中照射

深山照射

野照射

峰照射

樹陰照射

所々照射

名所照射

輝

鶯のたえにしねをや青柳のいによりつゝうつせみのこゑ  
契沖 長流

山

蟬のなく梢にみゆるもみちをやしくるゝ聲のそむるなるらん  
千蔭 春海

杜

吹かぬのいはまにむせふまし水にこすゑのせみの聲そわらそふ  
長流 契沖

樹陰

なくせみの趨もうすきくもり日の夕かけ山はかせそすゝしき  
春満 全

樹上

蟬の鳴もりにますかみなこすとも猶いちはやき聲やのこらむ  
宣長 契沖

瀧上

うつせみのよは秋風をかきりとやなけきのもりに聲しきるらん  
蘆庵 契沖

瀧邊

とろえて下葉の露になく蟬のおのか聲にこ木かくれもなし  
契沖 全

雨後

夏川の岸根の水はおとたえて梢をゆするせみのもろこゑ  
長流 古道

夕

れちたきつ岩せのおとにわらそひて山下とよみせみそなくなる  
全 契沖

名所

夕立のは山過にしこつたひにまたしくれゆくむらせみのこゑ  
契沖 全

蟬聲夏深

なつもはやこすゑの蟬のこゑにちる夕霧すゝし杉のした枝  
千蔭 自寛

晚夏

秋近くのへはなりてもなくせみのこゑはあつけきもりのした道  
土満 契沖

蟬聲秋近

蟬の聲きけはすゝしもおのか羽のひとへはかりに秋はちかけむ  
契沖 土満

寄蟬述懐

ねにたてゝなくとしらすや空蟬の身の秋ちかくなれるころもは  
契沖 土満

運

妹か髪ゆふるかさろふ高まとのをのへとよもしひくらしなくも  
契沖 土満

運

池水をいつるをちすのうきぬはくりにもそまぬはなのいろ哉  
春満 蘆庵

運

にこりにもしまぬはちすの花はなと移ふ色を世にならふらん  
契沖 土満

運

ありとさくむねのはちすも池水の濁にしめる身にはひらかす  
契沖 土満

風前

ちるもをしふくもすゝしき夕風におもひみたるゝはちすはの露  
契沖 土満

蓮含露

蓮葉のさしも葉ひろにおひぬらん露をかなしふみやひをの爲  
契沖 土満

蓮含露

はちす葉の上とのみやをあたにみん露こそ人の世のたぐひなれ  
契沖 土満

風前

糸はあれど我玉にともぬきとめぬはちすの露そ風にみたるゝ  
契沖 土満

蓮含露

白露のやどかりぬへき蓮葉にれそのたはれの池のゆふかせ  
契沖 土満

蓮露似玉

池 蓮

池上蓮  
夕 顔

簷夕顔  
陳屋夕顔  
墻夕顔

うちす葉のゆふゐる露にひかりあひてみたの御國の西日さす也 長流  
 玉かどてつゝめは消ぬ蓮葉におくしら露は手もふれてみん 蘆庵  
 うちよする涙かあらぬか夕風の吹うらかへすいけのはちす葉 千蔭  
 池水のいひしらぬまてかをる也はすのうき葉に風わたる頃 九み子  
 かけうつす池の鏡のきよければ葉かくれに咲花もみえけり 春海  
 池水のこゝろきよさもあらはれつにこりにしまぬ花のさかり也 全  
 此ころは賤かはひりやまよふらんとなりもおなしゆふかはの花 契沖  
 枕つくつまやの軒にかゝれるはまかきにあまる夕顔の花 枝直  
 どはてしもそれどはしるし遠方のかやかのきはのゆふかはの花 千蔭  
 中垣のあらはなりしもなつくればはひもてかくす夕かはの花 筑波子  
 たちよりて今一ふさや折てましみすてかてなるはなのゆふかは 九み子  
 三日月のあるかなさかの光さへやとるか軒のゆふ顔の花 千蔭  
 みか月のかけもる軒の板間よりましろにみゆる夕かはの花 全  
 はえもなき片山里も夕顔にしつかかきはそやつれさりける 自寛  
 たそかれのまかきに咲て有明の月にきはへるゆふかはの花 枝直

瓜

熟 瓜

扇

閨中扇

閨扇風

扇不離手

扇風秋近

氷 室

賤のめか門のはしうりどりいれよ風ゆふたちて雨こはれきぬ 蘆庵  
 かゝる身のはてをつらく思ふには心はそちとまつなりにけり 全  
 しなかどの神のみむろにあらねども風はあふきにこもる之けり 契沖  
 袖にいつふ千年をふれてかははりの扇も雪のひるかへるらむ 長流  
 末つひに秋にあふきやいとばれんと思へはやとる風もはかなし 春満  
 かせをねにならす扇の三重なからひとへに夏はわすられにけり 春海  
 閨のうちらうちもおかれぬ扇哉人たのめなる名はかこてども 千蔭  
 なつかしき香にこそ風もにはふなれ誰にこかれし閨のあふきそ 春海  
 たか手よりおきかはしめんまどゐして風まつよひの袖の扇は 蘆庵  
 うちもおかすどるや扇のこむらさき誰ゆかりとて袖にならせる 全  
 程もなく涼しかるへき秋そとはならてあふきのかせそつけゝる 春海  
 秋はとくあふきの風にかよひけりたもとに月のかけをやとして 蘆庵  
 夏もやゝみそきはなくなりぬとはならず扇の風そしらす 枝直  
 ひむろ山なつなきとしのさかさまに春さへくれて冬やかよへる 契沖  
 夏の日も大御光にけたるらん去年のみゆきもけふをまちけり 千蔭

氷室涼

千代かけてきえぬためしと氷室守松崎には住ならしけむ 春海

名所氷室

大君の御代なかさかのひむろもりいくとせなつをよそに住らん 全

かけ高きこす糸のせみの聲はかり夏をつけのゝひむろ也けり 千

氷さへきえせてけふをまつかさき千とせかはらぬみつき也けり 全

みなつきのけふをも冬とつけのゝにとわやまたぬ氷をそみる 長

消ぬまど都へいそくひむろもり道なかさかのほとやわふらん 春海

もる人は冬を常磐の氷室山いてゝうき世のなつをしるらむ 春

いかてわれもるてふ人に身をかへてひむろの山になつを過さん 春

たちいてゝすゝむ外面の木陰よりかへりもあへぬゆふたちの空 春

鳴神のねとはの山は雲はれて關のこなたをすくるゆふたち 契

みるかうちに雨きはひ来て夕立のくもにかくるゝ嶺のまつはら 蘆

ふたこ山みねに北行雲みえてゆふたちすなりあしの海つら 春

筑波ねに雲みえそめて時のまにすみた河原を過るゆふたち 千

ゆふたちのなこりを見せてくれ深く月にたゝよふ雲のすゝしさ 宣

山陰やめなれぬ瀧を岩かねにのこしてはるゝゆふたちの雲 蘆

氷室山

夕立

夕立雲

夕立風

夕立涼

夕立易過

遠夕立

遠山夕立

遠村夕立

山夕立

さらには又ねくらの鳥もさわくまでゆふたつあめのもりのした風 契

かきくらす雲もあつさも時のまによそに吹やるゆふたちの風 宣

ひわり戸の板間をやかてしめりあひぬ夕立雨の風さきの宿 長

吹かせ毛にたかにすゝしゆふたちの雲にまよひて秋やきぬらむ 宣

さと中のいさゝを河そにこりくるゆふたちすゝし水上のやま 契

雨よりもくもやあしとき夕立のそれもあへぬに日影こそさせ 蘆

鈴鹿路や山田か原はゆふたちのふるかどみればすきのむら立 宣

けふも又ゆふたちすらし山のはのどほきこす糸の雲かくれ行 蘆

あしからに入日のかけはさしなからうなかみかけて夕立をする 千

かせ山にゆふたちすれといつみ河とほきわたりは水毛にこらす 宣

入間路は夕立すらしなにも似すすみた河らの水のにこれる 枝

さかみちはゆふたちすらし久かたのあふりの嶺に雲そおほへる 千

をちかたやさとのけふりはかさくれて雲たちのほる夕立の空 宣

たかねにはゆふたちすらし山のはにみなれぬ瀧の岩くゝるみゆ 枝

すゝしさは空にかよひて山鳥のをのへゝたつるゆふたちの雲 春

川夕立

水上やゆふたちすらしみるかうちに一すちにこるさとの中河 全

にひた山うきくもさわく夕たちにとねの河水うはにこりせり 眞淵

夕立のくもにきはひてすしさのますけかたよるそかの河風 宣長

野夕立

やたのゝは夕たちすらし吹かせのあらしの峰にさ雲さわくなり 契沖

ゆふたちにぬれし袂のかわくまでなほもいく野の道をはるけき 宣長

夕立の雨きはふ野のひとつ松たのむかけとやいそくたひ人 盧庵

原夕立

おはひえやをひえの雲のめぐり来て夕立すなり粟津のゝ原 眞淵

をくきよりひとむら雲のみえそめてゆふたち過るむさしのゝ原 千蔭

里夕立

夕立の軒の玉水たまちりてくまぬもすゝしるてのさど人 契沖

峰過る雲にかけろふ夕立のよそめすゝしきやまもとのさど 宣長

市夕立

夕立のたつの市人空にさへゆきかふ神ぞ鳴さわきける 契沖

行路夕立

ゆふたちのふるの中道さどゝはみすゝまぬ人も木陰にそよる 全

旅人のみのふくかせもすゝしけにふりゆく野路のゆふ立の雨 宣長

浦邊夕立

すまの浦やゆふたつ浪のたちまちにうしろの山を又くもりゆく 契沖

浦夕立

二並の筑波の山に雲みえて霞かららをすくる夕立 枝直

橋夕立

さどわきてかたえはゝるゝ夕立に猶なるかみのとゝろきのとし 全

夕立晴

くちもせぬなのみなからのあとゝめて夕立わたる雲のかけはし 全

夕立晴

夕立のはけしかりつる空はれて庭にひれふるもふしつかふな 全

夕立晴

夕立の晴るゝかはへのなひきねふしをれし花に夕日にはへり 千蔭

泉

かくなから月やゝどらん夕立のなこりどゝむるたまさゝのつゆ 春海

泉

日さかりの道ゆきなやむ岩かねにしなぬくすりのやまのゐの水 長流

泉

さどなかの板ゐの清水たちとまりくめはゆきかふ袖をすゝしき 契沖

泉

手にむすふ人しなけれは夏ふかき山ゐのし水すむかひやある 春満

泉

むすこてもすゝしき物を車にはよしやにこさしやまのゐの水 宣長

泉

いつしかとおもひし秋は山陰のいつみのみつに今もすみけり 蘆庵

泉

日くるれは泉のもとをたちさりておすれし夏にかへるものうさ 宣長

泉

すゝみすと山ゐの水をいくむすひむすへどもなほわかぬけふ哉 春海

泉

むすふてのしつくやこほる山陰のいはもる水になつしなけれは 千蔭

泉

柴人のしとしあつさをわすれつゝむすふ山路の松のしたみつ 宣長

泉

なつくさのしたゆく水をせきとめて秋にちきりや先むすふらん 枝直



山家納涼

みな月のてる日もよそにへたてたる茂木かもとの庵すししも ねみ子

山陰納涼

山里の葉ひろかしその下すしみ世はなつなれやあつさわふらむ 契沖

浦納涼

瀧のいとすゑせきいれていくむすひ手にむすふらん山陰の庵 千蔭

海邊納涼

風そよく浦のあしへのすししさいにかてか浪のたちかへるらん 筑波子

船納涼

わたつみのなみ吹風をおはしまに待とるやとは夏なかりけり 千蔭

河邊納涼

夕川のすしさとめてこく船は水のこころのゆくにまかせむ 春満

水邊納涼

秋さへも浪にたくひてよせくらんゆふしはのはる河つらのやと 千蔭

納涼到晚

夏川の石間の水のすししさに魚のこころもわれにてそしる 契沖

夕納涼

河原風かよへるやとにをす巻て月まつほどの袂すししくも ねみ子

夕納涼

立よれば山陰すししなつみ川なつてふとやなみのぬれきぬ 眞淵

夕納涼

池ひろみやちたひむすふしづくにもにこらぬ水の色そすししき 千蔭

夕納涼

みなさしの柳かたよる河風をそてにならしてけふはくらしつ 蘆庵

岩間行水せきとめてゆふつしの影を手にくむ袂すらしき 枝直

みな月のてる日もさすかかけろふの夕さうくれは風を涼しき 蘆庵

たちよれば立さうかたし夏衣ひとゆふかせのかよふ木陰に 春満

夜納涼

夕つく日かけろふ庭のすししきに月まらいてゆかはゆかなん 常樹

野納涼

夕かせも月も心にまかせつなつをたのしむかはつらのやと ねみ子

麓納涼

かせそよく堀江のをふね行かへりねをしあしへにすしむ夏の上 宣長

橋邊納涼

なつの日も夕へすししくかけろふの小野の秋津に秋やかよへる 全

行路納涼

ゆふ日かけもらぬふもとの石あつし秋をくみしる木の下風 枝直

家々納涼

かは風の柳をわたるすししさいにひとはやすらふはしのうへかな 契沖

高殿にすしみる

なつのもく道のかたへのひとつ松まさるかけなく風そすししき 全

高殿にすしみる

いへことにねなしなかれをせきいれて夏をよそなる河つらの里 枝直

名所納涼

開もなほ螢とひかふよひのまはいやすかかけぬやとしもそなき 千蔭

名所納涼

たかさやは涼しかりけりあらかねの土てふものし夏にや有らむ 眞淵

名所納涼

高殿に月をこそまで雨過るこそゑの露を袖にかけつし 千蔭

名所納涼

このどのになかやどりせよと螢雲のうへまでいぬへかりせは 枝直

名所納涼

玉たれのをすかかけては高殿にふしの高ねのかせかよふまで 千蔭

名所納涼

こよろきの磯のなみわけまたきより秋きにけらし風のすししき 全

名所納涼

夕しほのみつの濱松まら戀し風もたちそふなみのすししき 宣長

納涼忘夏	秋かどよかせまつかけのうたゝねも覺ておどろく袖のすゝしさ	全
樹陰夏風	衣手もぬるゝはかりにおほゆるや水枝吹おろす木ゝのした風	春海
樹陰隣秋	なつと秋はたゝあしかきのひとへにてみつえすゝしき庭の面哉	千蔭
水風如秋	水のれと松のひゝきは秋なからなつをことわるやみのこゑかな	全
水風晚涼	夕かせのさそはさりせは池水の心になつをわするへしやは	春海
	すゝしさはみきはの松にこゑかはすせみの小川の浪のゆふかせ	宣長
	ひをのよる河瀬の風や夏のよのいさよふなみになほのこるらん	千蔭
水風夜涼	かゝり火のはかけまたゝく風更て枕にすゝしやり水のおと	全
水風夜深	にし河やせき入し水のねはしまにしゝ秋のかせそかよへる	全
水檻風涼	蓮葉の露をかりふく夕かせもなきさのやどは先そすゝしき	春海
近水微涼生	水清きさしの桂のおひ風にもふ風かをる袖そすゝしき	千蔭
風來水樹間	山河の岩こす浪を秋つはのたもとにかくる松のしたかせ	全
水邊自秋涼	さはかせは今さへすゝし夏衣ひもゆふ河にちどりなくまで	長流
	浪をふくかせ山もとの泉川秋にもこえてそてそすゝしき	契沖
晚夏	行雲もはたるのかけもかろけなりこん秋ちかきゆふかせの空	真淵

晚夏涼	ねふの花ちりてなかるゝ河水のこやくもなつはくれんとすらむ	千蔭
晚夏風	川風にちかきみそきのおもかけもかねてすゝしき浪のしらゆふ	宣長
	あけかたの露のひかりも秋近き月にすゝしきにこのあさちふ	全
夏祓	空たかくはたるをさそふ夕風の身にしむまでになれる夏かな	真淵
	萬代とひかしもにしもとなふなりはらへのこせる罪やなからん	全
	何こどもすつるとならば身に積る老もなこしのはらへならなむ	蘆庵
	なつ衣ひもゆふかけてつみどかをよもにみそきの袖もすゝしき	春滿
河邊夏祓	うきとも嬉しきせにやかはるらんあすかの川にみそきしつれば	千蔭
瀬夏祓	真心をすみた河原の中つ瀬に神代のまゝのみそきしてけり	全
海邊夏祓	大淀の浦になかせるすて衣伊勢をのあまやみそきしつらん	長流
湖邊夏祓	くる秋をまつのした陰風きよみゝそきすゝしき志賀の辛崎	千蔭
夜夏祓	夕はらへかへさよふけてとなせ河秋のとなりとまちなりけり	契沖
名所夏祓	もろ人はけふそ都のにし河に秋まちかてらみそきしにける	千蔭
	よしの川みそきになかす麻の葉や夏と秋とのなかにおつらむ	真淵
杜夏祓	さきはらふあまつすかそに露ちりて心もきよき杜のしたかせ	千蔭



家々夏祓  
六月祓

はらへせぬ家しなけれはつみといふつみとのこらし天津益人  
天津罪はらふゆふへは雲ぬ吹かせもすしくなりけるかな  
夕かけて波風すゝしたかみそきはや秋津日の神はうけゝん

千 蔭  
真 淵  
春 滿  
枝 直

水邊六月祓

けふとてややまどかふちのいみき部の太刀たてまつる萬代の聲  
いたつらに過る月日と身のうさどかたへはをしき夏はらへしつ  
つみどかも暑さもけふそなかるめるはや川の瀬の神のまにゝ  
さくもなほうさせはおなしみそき川又人なみにはらへをやせむ  
ゆふくれの涙も去つけしみそき川瀬織津姫もなこしうくらむ

千 蔭  
蘆 庵  
枝 直

日暮六月祓

住吉の濱邊のみそきくれゆけは松をあき風けふよりそふく

長 流

名越祓  
荒和祓

いくちゝのよをかへぬへき年とにけふのなこしの祓へしつれば  
御祓河かせのまにゝおほぬさも荒振神もはなちてそやる  
みそきかは瀬ゝになかるゝすかの葉のわなすかゝし水の白浪

千 蔭  
契 冲  
春 海

祓 麻

みそき川なみかすならぬ人かたはをらへすつとも猶やしつまむ  
つかさ人きよきなきさにぬさどるややかていつきの宮移りどて  
きのふしもかさねにおひしくれ竹のひとよを秋のへたて也けり

春 海  
蘆 庵  
千 蔭

秋隔一夜

野亭秋近

かひしける庭のなつくさからてしもあすこん秋の露をまたまし  
都人千くさ見にくる秋ちかみ露よりさきにむすふいはかな

全 全

來客夏稀

なつの來てには草しけくなるまゝにかれこそまされ宿の人めは

蘆 庵

六月晦日

夏と秋と行わひのわけのいなめはかたへよりこそ露も置らめ

契 冲

夏のはて

みそきする川瀬のよどはありなから早くもくれて夏はいぬめり

土 滿

夏天象

わたの原とよさかのほる朝日まのみかけかしこちみな月のそら

真 淵

夏 日

きのふけふ照日かしてし早苗とるたつらのみなぬぬるみ行まで

千 蔭

夏 雲

なつの日といとゝ水なき大空におはたつ雲の嶺そあやしき

長 流

夏 雨

なつきてはしつかさ衣はさぬ日も雲こそかゝれあめのかく山

千 蔭

夏 風

見るまゝにかはりもゆくか夏山に雲のなしたる嶺の姿は

枝 直

夏 雨

五月雨にふりはてにきとみし雨のいかにのこりてゆふたちの空

長 流

夏 風

吹かせの心はつねにあらめともなつこそひとにしたしまれけれ

真 淵

松風五月寒

なつの日のあつきさかりと吹かせもうすき袂を猶へたてけり

蘆 庵

夏 露

はとゝさすおのかさ月やたどるらん今も身にしむ松のあらしに

枝 直

夕月のかけこそうつれうゑわたす川そひをたの露の玉なへ

千 蔭

夏朝	朝なくわれさへ立もいつるかな池の蓮葉かすやそふとて	契冲
夏夕	松陰のちりうちらはらへけふの日もゆふかせたちぬ夕すゝみせむ	蘆庵
夏浦夕	ゆふすゝみ袖にまつらの浦風もまた秋とはきもろこしの空	宣長
夏山夕	ならの木の葉山の夕日かけるふのあるにもあらず夏のなこりは	長流
夏夜	すゝしさをひとへにたのむ夏衣うすきをいとふころもありしに	春満
夏夜興	なつのよはむすふあやめの枕たにね長き名をはかるかひもなし	春海
夏夜短	夏の夜はゆふやみもよしやり水のゆくかたみゆるかゝり火の影	千蔭
夏曉	いはと山さしも程なくあくるまをいつとしりてかいさよひの月	長流
夏山	檣の戸をたゞく水雞のいつはりも誠になりてあくるみしかよ	契冲
夏杜	なつのよはそしるなからにをちかたの鐘におどろく曉のそら	千蔭
夏里	高ねには夏しも雪のふるといふあやしき山そふしのしは山	たみ子
	さみたれはみなふちとみしほともなく細川山の日さかりの空	長流
	涼しさに秋もしのはすしのたなる千枝の木陰にいほりしをれば	たみ子
	さく人はこゝひのもりにしたふともしらて過行やまほとゝきす	春海
	濱風の松吹こゆるすゝしさに夏の海邊もすみよしのさと	契冲

夏故郷	君ましゝむかしの花の藤原をほとゝきすこそ今もどひけれ	眞淵
關路夏	あふさかの山路こえゆく夏の日はせきの清水そ人をとゝむる	千蔭
夏旅	みなれこし笠をかたみのしるへにてとゝひかはす野路の旅人	全
夏旅宿	かくれしとたかあくかれし玉とみん草の枕にかよふはたるそ	枝直
夏井	さとゝはき板ゐのし水いたつらに空たにしらぬ秋そなかるゝ	契冲
夏市	うた垣にふりにしあをを椿市にしのひてきなくほとゝきすかも	千蔭
夏田	はるゝとみゆる水田の若苗の葉なみかたよる風そすゝしき	蘆庵
夏山里	みつえさし清水なかるゝ山さとを花にのみなととひならしけん	春海
山家夏	谷の戸のむすゝ清水はあさけれとふかくなりゆく夏木立かな	枝直
夏海	夕されそみなみの風に雲消てみるめすゝしきおきの漁火	蘆庵
夏河	六月のてる日にかれてふみわたるさゝれもあつき夏の山川	全
夏瀧	すゝしさをこゝにせき入ておどは川瀧の外をや夏は行らん	蘆庵
夏舟	たち花の小島か崎のおひ風に棹さす袖も香にそにはへる	春海
夏門	すゝしさもかくある夏のすみかどはたれみいれすや杉たてる門	春満
夏門車	飛鳥井にやとるともなき小車を門ひきいるゝほとそうきたる	たみ子

夏車	もろかつらけふのいとけの小車にかけて久しきためし也けり	千蔭
夏鳥	みしかよのはかなさつて鳴そらのをりあはれなる朝からす哉	眞淵
夏虫	庭のおもにそこはかとなきむしのねをりあはれなる夏の夕暮	全
夏獸	うら若き夏の萩原ゆく鹿はれのかつまともしらすやあるらん	土満
夏牛	なつの日にちから車を引なやむわさをやうしと名はおひにけむ	全
夏狩	つかのまの角にいのちをかけてけり夏野の鹿のかりにあふ日は	長流
夏野	日をさふる陰しなけれおのつから野へのゆきよそ夏は稀なる	蘆庵
夏衣	百くさのなかににはへる深ゆりのふかくも夏の野はなりにけり	古道
行路夏衣	夏の野のしけき草葉のしたとに花のいろくふみたるらん	土満
夏糸	なつ衣きのふはけふの昔とそうつりかはれる花そめのそて	春満
夏鐘	やちまたにかけたちならす橋の花のかどりの袖そすしき	千蔭
夏鐘	つくはねのにひくはまゆの夏引をたなはたつめにあすや手向ん	全
夏聲	錦ともわやともなつはすかむしろかけしく月のよるの涼しさ	蘆庵
夏聲	なつくればよひ曉のみしかよに時つくかねの聲もひまなし	全
夏聲	瀧川の岩こす波にさそはれてみねよりおつるせみのもろ聲	春海

夏眺望	やしほちは夕立すらし島山のくもゆくかたにさわくふな人	千蔭
夏遠望	ふりさけてみればすしもみな月のそのよふるとふふしの白雪	土満
夏人事	夏山のをしかの角のみしかよをたかうへとてかかりくらすらん	契冲
夏思	花にいとひもみちにうとむ風をしもおもふそ夏の心なりける	たみ子
夏夢	夏のよのあかぬ名残のうたよねにみえぬ夢こそいやはかなけれ	土満
夏述懐	みなかみもあはれと見ませ老の浪立そふ身にもはらふうきせを	蘆庵
夏懷舊	さみたれのふりし昔をしのふれはほとよきすさへ鳴わたりけり	千蔭
夏釋教	おもひやるみたの御國の池水やはちすのうへにゆらくしら玉	契冲
夏神祇	露むすふすよの若葉をたてなから八十玉くしと神にまつらん	千蔭
夏神樂	秋つはのたもとに麻の露ちりて河瀬すしき神あそひかな	全
夏祝	ふる雨にさなへをうゑて國の名のみつほの秋をまつそ楽しき	眞淵
卯月	ほとよきす今かきなかん山かつのかさねのうつき花さきにけり	蘆庵
五月	ますらをは駒くらへせり乙女らもけふのあやめのねを合せみん	全

六月

風をのみしたしき友とたのみつゝあやなくくらすみなつきの空

筑波子

閏六月

玉くしけふたゝひきたる水無月は秋をかけこのこゝちこそすれ

契冲

布計里  
夏以下同

やととに秋やまつらん夕風のふけのさと人かとすゝみして

蘆庵

檜小河

風わたるならの小河のゆふすゝみ見そきもあへす夏そなかるゝ

全

勝間田海

海たにもかはるよそかし早苗とるあたりやもとのかつまたの池

全

布留

ふるの山宮ああれぬと神やつこいかにわふらんさみたれのころ

全

葛飾

五月雨はくむ人もなしかつしかやにこりそめたるまゝのゐの水

全

名取川

はれまなきさ月の雨の名取川もとみしせゝやふちの水底

全

筑摩

さみたれはあやめの葉末浪こえて岸のうはてにつくまえの水

全

藪浪里

降雨にかやりの煙うちしめりいふせくみゆるやふなみのさと

全

大葉山

霜たちこのめけふりしほともなく大葉のやまに夏はきにけり

全

鴨川

ゆふすゝみ石はふむとも石川やかもの川つらあそひてゆかん

嵩蹊

大井川

おほる河若葉すゝしき山陰のみとりをわくる水のしらなみ

真淵

布引瀧

夕立のよめのなこりのうき雲になかはたえけり布引の瀧

枝直

會津山

紐ときてたひねやせましわきも子にあひつの山のなつ陰もよし

千蔭

那須野

草深きなすのしの原しのひつゝ聲たにたてぬをしかゝるはや

全

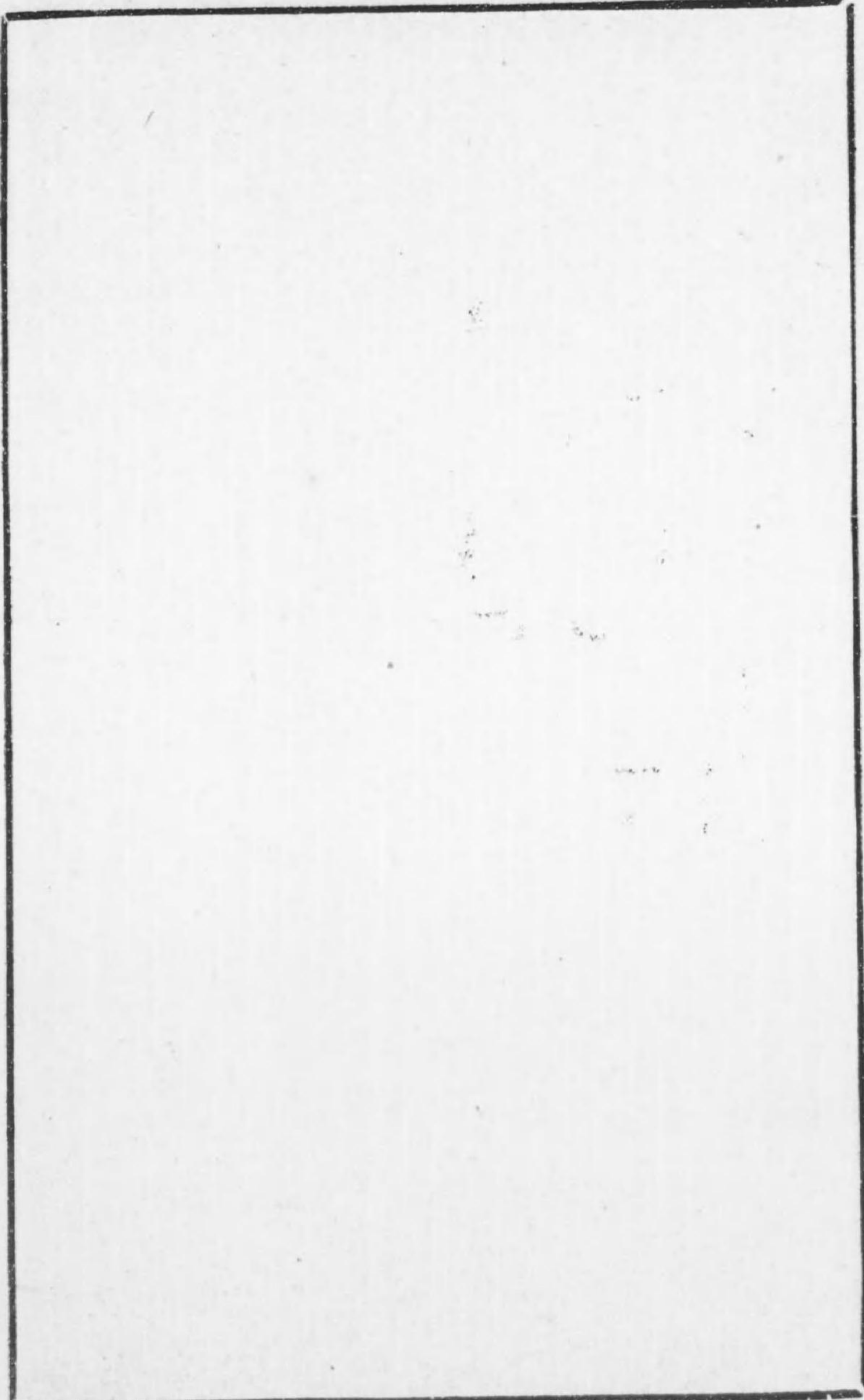
筑波嶺

たち花は咲にけらしな筑波山は山しけ山かせかをるなり

古道

類題草野集上卷 夏之部 終

256  
372



終